

---

# 鬼の女～血の娘～

獅兎羅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鬼の女ゝ血の娘ゝ

### 【Nコード】

N9807Z

### 【作者名】

獅兔羅

### 【あらすじ】

鬼兵隊の鬼の女 芦咲あしざき 露吞あいのは真選組の隊士殺しを高杉から頼まれる。そこで懐かしい人たちに出会う。

「お前らは恨まないのか……。この世界を恨まないのか。」  
別れ際に言った女性の一言に懐かしい人たちは昔の人の面影を感じ・  
・・・。

## 第一訓 掴みどころがない男

貴方に会えてよかった。

私がそう思ったのはいつのことだろうか……。

「ねえ晋助。貴方はなにを考えているの？」

赤色の模様が入った着物を着た女性が言った。

しかし、その模様は血だった。

それも、全て自分の血ではない他の人からの返り血。

「さあーな、俺にもそれはわからねえーことだ。」

冷たい声で高杉は言った。

「貴方は本当に掴みどころのない男ですね。」

女性は笑顔で言った。

「それはオメーもだろ、あらの霰呑。」

高杉が言った。

「私はおんなよ。」

笑顔で言った。

その笑顔を見る高杉。

「そうだ、露吞。ひとつ頼んでいいか？」  
「なんでもどうぞ。」

露吞は笑顔で言った。

「真選組の隊士何人かを殺してくれないか？」

高杉が言った。

「私、一人ですか？」

露吞が聞く。

「オメーなら簡単だろ？」

冷たい声で言った。

「ええ。分かりました。」

露吞はそう言つと船から降りて行つた。

「露吞・・・いや、春楨しゅんかお前は先生を奪つたこの世界を恨まないのか？」

高杉が言った。

かなしさを含んだ声で。



## 第一訓 掴みどころがない男（後書き）

露呑の本名は芦咲 露呑です。

春榎の正体はこれから分かりますよ。

感想お願いします

## 第二訓 隊士殺し（前書き）

残酷表現あります。

苦手な方はお控えください。

## 第二訓 隊士殺し

「邪魔するぜ。」

真選組の屯所にはなぜか銀時と神楽、新八が居た。

「で、依頼っつーのはなんだ？」

銀時が言った。

「それはな・・・『ドーン』・・・なんだ？」

土方の声を大きな音が遮った。

「副長、大変です。攘夷浪士が攻めてきました。」  
「なに！？」

土方が声を上げた。

土方は刀をとり、外へ走り出した。  
その後を万事屋組が追いかけた。

「あらら、真選組ともあろうに弱いんですね。」

土方たちが外へ出るとそこには一人の女性が居た。  
女性の着物は血に染まり、頬にも返り血が付いている。  
その女性の前には倒れている真選組の隊士が居た。  
そして、近くには山崎が刀を構えている。

「山崎！！」



土方が叫んだときにはもう遅く、女性は刀を振り下ろした。

ドーン。

「ぐっ……。」

「だ、旦那……。」

女性の刀は銀時が止めていた。

「あらら、なかなかやるのね。白夜叉。」

女性が言った。

「お前なぜそれを？そのことを知ってんのは数すくねーぞ。」

銀時が驚いて行った。

「晋助から聞きました。」

女性が言った。

「お前……何もんだ？」

土方が言った。

「私は芦咲 露吞の申します。鬼兵隊の総統補佐ですわ。」

露吞が言った。

「總統補佐だと・・・？」

土方が言った。

「はい。晋助に一番近い幹部ですわ。」

そのことに驚きを隠せない土方。

「今回晋助からの真選組の隊士殺しをしろと言われたので参上いたしました。」

「隊士殺しだと！？」

土方が声を上げた。

露吞は笑っただけだった。

「お前俺と会ったことがあるか？」

銀時が言った。

「私は知りませんが、晋助は俺のなじみだと。」

露吞が言った。

「では、私はお暇させてもらいますわ。」

露吞はそう言い、去って行った。

私は嘘をついている・・・。

銀時。

貴方に会えて嬉しいのに・・・。

嬉しくてたまらないのに。

私の・・・初恋の人。

## 第二訓 隊士殺し（後書き）

どうでしたか？

感想をお願いします。

### 第三訓 初恋の相手（前書き）

この話で・・・銀時がぶつ壊れます。  
銀時ファンの方、見ない方がいいです。  
ショックを受けます・・・。

### 第三訓 初恋の相手

「お前らそこに居ろ!!」

銀時はそう叫び、露吞のあとを追った。

露吞は塀に向いて肩を震わせていた。

「露吞だっけ？」

不意に声をかけられて、露吞が振り返る。  
その目は赤かった。

「あら、来たのですか？白夜叉。」

露吞が言った。

「オメーこそ何やってる、こんなところで泣いてよ。」

銀時が言った。

「泣いてなどいませんわよ。」

露吞が言った。

「強がりには昔から変わらねえーな。」

銀時が言った。

その声に露吞は肩を落とした。

「はあー、気づいてたの？」

「当たり前だろ？」

そんな二人の様子を電柱の影から土方、沖田、神楽、新八が見ている。

「あの二人知り合いかいネ。」

「そうですネイ。」

「あんな美しい顔して人を斬るなんてな。」

4人はそんな会話をしている。

「お前、髪切ったんだな。」

「晋助が短いほうが似合うって。」

露吞は笑顔で言った。

「なあ、春樹。」

「その名前で呼んでくれるんだ。」

さつきよりさらに笑顔で言った。

「なんで総統補佐なんかに？」

銀時が聞いた。

「不思議じゃないでしょ？戦時中だって鬼兵隊の副官だったから。」  
「そうだけだよ……。」

銀時が少しか小さな声で言った。

「もしかして心配なの？」

露吞がからかうように言った。

「んなことない！！」

銀時が言った。

それを見てクスクス笑う。

「ヅラは元気にしてる？」

「ああ。」

銀時が言った。

「そうなんだ。また会いたいな。」

露吞が懐かしそうに言った。

「きっと会えるぞー。」

あっさり言う銀時。

「そうね。指名手配なのにあちらこちらに居そうだもん。」

露吞が言った。

「高杉も変わらないだろ。」



聞きなれた声がした。

「ッラ!？」

銀時が驚いた声を出す。

沖田と土方が身構える。

「春榎も一緒か？」

「あらい瞬で分かった？」

露吞が聞く。

「当たり前だろ……。村塾のマドンナだったからな。」

「やめてよ。そんな言い方。」

露吞が笑う。

「じゃあ俺行くわ。」

ッラはそう言い、去って行った。

「晋助も変わりないか……。」

露吞はそう呟き、クスツと笑った。

「昨日も散歩に言って怪我して帰ってきたんだよ。」

露吞が言った。

「あいつは本当に変わってないな。」

銀時が言った。

「変わったよ……。だって昔はあんなじゃなかったじゃん。」

露吞が言った。

銀時も曇った顔を見せた。

「ねえ、銀時。昔に戻れると思う？戦時中や村塾の時に……。」

露吞が聞いた。

「さあーな。それは、高杉の考えによるだろ？」

「そうだね……。」

露吞が言った。

「銀ちゃんなんか幸せそうネ。」

神楽が言った。

「銀さんがあんな顔するの見たことないです。」

新八も言った。

「私、もう帰らなきゃ。晋助に怒られる。」

露吞がそう言った。

「春樓。お前は露吞として生きてくのか？」

「うん。ツラや晋助、銀時たちと二人きりの時は春榎に戻るよ。その方が私もいいもん。」

露吞が言った。

「そうか。」

銀時が言った。

そして、何か悩んだ後言う。

「春榎……。顔貸して……。？」

「いいよ。」

露吞が笑顔で言った。

その様子を電柱の影で声をひそめてみる。

「本当にか？」

「うん。」

すると、銀時は露吞の体を引き寄せて唇に唇を重ねた。

それに露吞は抵抗しないで身を預けた。

その様子をあぜんと見る新八たち。

「あれってキスですよネイ。」

沖田がぽかんと言う。

「ああ……。？」

土方も呆然としている。

「春樹……。会えてうれしいよ……。」

銀時が幸せそうな笑顔で言った。

「私も嬉しい！銀時……。」

露舌はそう言い、銀時に抱きついた。

銀時も抱きしめる。

「銀さんってあんなことできるんですね……。」

新八が呟いた。

「銀時……。ありがとう。」

「こちらこそ……。」

銀時はそう言い、露舌を放した。

そして、露舌は背を向け歩き出した。

その後すぐ振り返り一言告げた。

「ねえ、銀時。お前らは恨まないのか……。この世界を恨まないのか。」

そう言い、去って行った。

「恨んでるよ、春樹。お前と高杉を裏の世界へ連れ込んだこの世界を……。先生を奪ったこの世界を……。」

銀時は静かな声で言った。

誰のも聞こえないほど小さな声で・・・。

「で、お前らはみるだけか？」

銀時に不意に言われ、新八たちは電柱の影から姿を現した。

「銀ちゃん。あの人斬り女。知り合いアルか？」

神楽が聞いた。

「あいつは人斬りじゃねえーよ。ま、斬っちゃったけど・・・。」

銀時が言った。

「どういう意味だ？つーか真選組の隊士を殺そうとしたんだよ。」

土方が怒りを含んだ声で言った。

「あいつは高杉の頼みなら何でも聞くって言いたいんですかイ？」

沖田が言った。

「半分正解。でも全部ってわけじゃねえーよ。あいつにとっては晋助は兄貴的な存在だから逆らうときは逆らうさ。」

銀時が言った。

「あいつとはどんな関係だ？あんなラブラブして・・・。」

土方が聞く。

「初恋の相手だよ……。露吞は……。俺の初恋の相手なんだよ。」

「初恋……。ならなんであすこまでイチャつける？」

土方が聞く。

「両思いなんだよ、いまだにな。俺は今も好きだ……。露吞のことが……。」

銀時が言った。

「そうか……。だがあの女は鬼兵隊。しかもいいところ身分だ。指名手配されんのは時間の問題だぞ。」

土方が言った。

「それはあいつも分かってるだろ……。それでも高杉のもとに居たいんだよ。それがあいつだよ。」

銀時が言った。

「じゃ、けーるぞ。新八、神楽。」

そして、そう言い家へと歩いて行った。

銀時は変わってない……。

私の大好きな銀時だ……。

今も恋の相手だ・・・。

ねえ、晋助。

昔に戻れるかな？

### 第三訓 初恋の相手（後書き）

どうでしたか？

銀さんが・・・で自分で思いました・・・。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9807z/>

---

鬼の女～血の娘～

2011年12月30日22時46分発行